

ペリオ文書所見私記

秋 月 観 暎

まえがき

幾多の発見によって目覚ましい進歩を遂げた今世紀前半の東洋学の足跡は「発見の時代」の名に相応しいものがあるが、この進歩の素材となった新出資料の双璧として、中国における殷墟（河南省）出土の亀甲獣骨文と並べて、敦煌（甘肅省）の所謂石室遺書をあげることにより異議を挟む学者は少いであろう。今回、短期間ながら「ペリオ文書道教関係資料の調査研究ならびに道教信仰の実態調査」をテーマとした欧州・台湾における研究日程の半分以上をフランスに割いた所以も、外ならぬペリオ将来敦煌文書の調査を目的としたものである。

過日、未だ旅装を解かざる間に、本号の編集上の都合によって生じた紙面の余白を、在外研究報告をもって埋めよとの要請を受けたが、収集資料の整理分析はおろか、漸く送られてきたマイクロフィルムの焼付すら完了せざる時期に、熟さぬ拙稿をものして貴重な本誌の紙面を穢すに忍びず、一旦は辞退したのであったが、事情なお辞し難いものがあり、不本意ながら、急遽ペリオ文書調査の輪郭と若干の所感を草して、その責をふさぐこととした。もとより専門の研究内容に立ち入った知見の発表を意図するものでないことを、予め、お断りしておかねばならぬ。

周知の如く、所謂ペリオ文書とはフランスの東洋学者ポール・ペリオ (Paul Pelliot) が、中央アジア探検の折、一九〇七年に中国の西北、甘肅省敦煌県の千仏洞を調査して、発見した数千巻に及ぶ古文書であり、その内容は概ね四世紀(北魏)から十二世紀(宋)の間に、漢文・西藏文・梵文等によって記された書籍・經典・記録からなっている。これらの古文書資料は今日パリの国立図書館東洋部 (Le Département des Manuscrits orientaux de la Bibliothèque Nationale de Paris) に所蔵され、世界各国の学者の閲覧に供されているが、この文書の調査、整理は著しく遅れており、殆んど時を同じくして、イギリスのスタイン卿によって同じ敦煌から発見された、所謂スタイン文書がロンドンの大英博物館 (British Museum) に所蔵され、既に整理目録の出版が完了しているのみならず、全文書のコピーが日本の主要研究機関にまで収められているのは対照的であり、国立図書館の写真部がマイクロフィルム撮映の要請には応じているものの、文書を直接披見することなしに必要な資料の入手は困難な状況におかれている。この点については、かねて各国の東洋学者から批判や要望のあったところであり、畏友福井文雅教授の報ずるところによれば、先年もオランダにおいて開催された西欧中国学会議の席上、ケンブリッジ大学のヴァン・デル・ルーン教授から鋭い質問がフランスの学者団に対して発せられたと云うが、遅れ馳せながら、フランスは近年、この様な要望に応える整理目録の編纂に踏み切り、J・ジェルネ教授、呉其昱博士、M-R・セギー嬢等の努力によって『パリ国立図書館 ペリオ敦煌文書目録』の第一冊 (Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang (Fonds Pelliot chinois), Vol.1, Nos. 2001~2500, publié avec le concours de la Fondation Singer Polignac, Paris Bibliothèque Nationale, 1970) が漸く刊行されるに至った現状である。

もつとも、現在まで文書資料が全く出版されていない訳ではなく、例えば古く昭和十三年、当時台北帝大の教授であつた神田喜一郎博士が留学中に収録された写真の中から六十一点を選んで編まれた『敦煌秘籍留真』や、更に第二次大戦後、同博士のコレクションを接収した中華民国政府が、これに続くべき『同書』新編(二帙)を公刊しており、中国においても羅振玉氏の『鳴沙石室佚書』、同統編のほか、蔣斧・王重民氏等々によって幾多の資料集の出版が試みられているが、それにしても約五千巻を数えるペリオ文書の全容に較べれば物の数ではないし、現在、その入手すら困難なものが少くない状況であり、今秋、筆者の滞仏中、日本において前記『敦煌秘籍留真』の覆刊が行われたのも、この間の事情を物語るものであろう。また目録の編纂についても、フランスにおいてはともかく、中国の王重民氏編『敦煌遺書総目録』が刊行されており、不完全ながらも漢文文書の整理番号及び少なからぬ文書名の検索が可能となつたし、また道教関係についても、近年、日本の大淵忍爾博士の父子二代に亘る努力によって纏められた『道教経典目録』が出版され、ペリオ文書の第三七二六号以下の脱漏が惜しまれるものの、斯学の進展に優れたな道標を提供しており、今回の筆者の調査計画も、これら目録の裨益を被ること大なるものがあつたが、総じていえばペリオ文書の目録編纂の事業は、まだ十全には程遠いものがあるといえよう。

国立図書館における既刊第一分冊に続くべき目録の編纂は現在も着々進められているが、その陣容及び方針には多少の変更があつたようで、目下編纂の中心になつて仕事を進めているのはパリ大学に在る高等研究院 (Ecole pratique des Hautes Etudes) の M・スワミエ教授であり、彼の語るところによれば、次分冊から目録の解説内容を一層詳細なものにする計画であり、完成期日の見通しは必ずしも明らかではないが、完結すれば七冊位になる予定との由である。パリ滞在中、スワミエ教授が美しい夫人ともども、公私にわたつて示された懇篤な友誼は筆者の忘れえないところであり、その誠実謙虚な人柄と真剣な学究生活には甚だ感銘深いものがあつたが、教授はフランス東洋学の重

鎮、コレージュ・ド・フランス (Collège de France) 教授の R・A・スタン博士門下の俊秀として、練達した各国語を駆使し、東洋諸宗教史の研究に中広い業績をあげており、今後のフランス東洋学を背負って立つべき学者であるだけに、ペリオ文書の目録編纂の主任として、最適任者であることは衆目の認めるところであろう。やがて完璧な目録の完成によって、世界の東洋学界長年の飢渴を癒す日も遠くはあるまい。

二

ペリオ文書を所蔵する国立図書館は、有名なパレ・ロワイヤルの近く、リシェリウ通りに面し、広い石畳敷きの中庭を抱えた矩形の、古い大きな石造建築であり、東洋部は西側中央に開かれた正門を入り、左隅の小さな入口から昇った三階にある。今時、ワイヤーロープが露出した鉄柵造りの古めかしいエレベーターが動いているのは珍しかったが、毎朝市街の雑踏を通して、直ちに古代資料の世界に直面する筆者の緊張を和らげ、気分を転換を助ける好ましい乗物でもあった。文書の閲覧の為には事務室で交付する入館許可証が必要であり、写真を貼り付けた二つ折の許可証を提示して閲覧室に入る。約三十席ほどの机の列ぶ部屋の四周は吹抜けの中二階に至るまで、東洋関係辞典類を主とした開架の書籍で埋っており、与えられた大きな皮張りの頑丈な机に着き、煙草も喫わず、種々様々な古文書を熱心に繙いている各国人男女学者の醸ち出す、真摯な雰囲気は甚だ印象深いものがあった。

ペリオ文書は一卷ごと、木製の細軸に巻き付け、更に文書番号を記入した茶色の厚紙で巻いて紐で結ぶ簡素な様式で所蔵されており、文書の腐敗部分は透明な絹地様の布をもって補修がなされている。そのお手並みは御世辞にも巧いとはいえないが、文書の原形保存に細心の注意が払われている点は流石である。文書の借覧については、借出書に所要文書の番号を記入して受付けに提出すれば、館員が各自の机まで運んできてくれる親切もあるが、一回に三点以

内、それも一回ごと、ピンク色の部厚い借出書の左右両面に、住所氏名からホテルの部屋の番号まで記載させられるのは、少々億劫の感を免がれなかった。調査を終了するまで合せて二百枚程も記入したのであるか。然し重文級の古文書の貸し出しに、これ以上の自由な開放を求めること自体が無理というものである。既に触れたように、屋内の禁煙は勿論であるが、石畳の広い中庭を通行する一般入館者の喫煙を見つけた館員が、走り寄って注意を与える風景に屢々出逢ったのは、貴重な文書類の保全が館員全体の周到な注意のもとに行なわれていることを示す一つの証左でもある。

三

今回の調査は短期間のこととて、自から調査の範囲を限定せざるをえなかったのは残念なことであったが、この様な制約の下で作業効率を高めるべく、特に調査の重点を

- (1) 浄明道の展開を中心とした中国宗教史研究資料の収集
- (2) 道蔵未収道経の弁別と収集
- (3) 断片道経の整理と經典名の判定

の三点に絞り、前記の目録類によって、予め目星をつけた文書二四八点について調査し、目下焼付中のものを含めて六一点の資料を弁別収集することをえた。これらの資料の分析結果に関しては、前記の様に未だ言及しうる段階ではないので触れないが、調査中、例えば(1)・(3)に関連して、首尾欠落の道経断片である文書第二二五四号に「浄明」の語が検出されたが、これは筆者が現在もっぱら携わっている近世中国の新道教々団の名称となるものであり、検討の結果、この文書は『太上一乗海空智蔵経』の断片であるとの推定に達したが、この經典の成立は中唐期を下らず、これによ

つて、從來、五代を上限と見ていた八淨明Vの語の初出年代を、少くとも二〇〇年以上、確実に溯らせうるだけでなく、淨明道の思想的系譜の究明にも有力な手懸りがえられたことは、筆者にとって密かな興奮を禁じえない収穫の一つであつたし、また調査を予定していた文書第三八八四号が、たまたま図書館構内で開催中のオリエント展に出品されており、その筆写に赴いた際、目についた筆者初見の光琳作の絵画「秋の草花」の写真を購入したが、裏面の解説は菊をダリヤ (Dahlia) と誤り、画家を Korin Katashii としていたが、光琳の姓は尾形の筈であり、不思議に思つて署名を検討した結果、Katashii (片橋) とは草書風に記した「法橋」——僧侶をはじめ仏師、絵師等に与えられた位階であり、彼は元禄十四年、四四才で法橋に叙せられている——の誤読であるとの確信をえ、連絡して再考を求めたことも世話になつた国立図書館に対するささやかな恩返しとなつたものと考えている。

四

今回の調査の仕事を通じて接した様々な人々が懐しく思い出される此頃であるが、既に予定の紙数も超えたので、最後に特に印象深かつた二・三の学者の面影を記して擱筆しよう。漸くバカンスの季節も終り、パリの街に涼しさを加えた一夜、郊外のスワミエ教授宅に招かれた歓迎パーティーの席上、厳密な考証と峻厳な弟子の練成をもつて聞える、前記スタン博士のイメージを覆すような機智に溢れた陽気な歓談のリードぶりに、いかにもフランス人の典型を見る思いであつたが、時折漏れる離反した娘に対する愛惜の情には、隠された人間スタンの一面を覗かせるものがあり、博士に対する親近感を一層深めるものがあつた。また互に論文を通して識り合いながら、今回初めて顔を合せて以来、図書館の内外で遭う度に、遙か遠方から、いち早く片手を挙げ、にこやかな挨拶を送ることを欠かさなかつた小柄な呉其昱博士の人懐っこい風貌も妙に忘れ難い。毎日のように筆者の向い側に陣取り、熱心に西蔵語文献の力

トドを取っていた、一見、達磨風の厳かめしいヒゲの学者は、オーストリア大学のT・フリードリッヒ博士であった。どちらからともなく挨拶を交わすに至って、休憩のお茶を共にしながら交した論談の数々も楽しいものであったが、その風采とは全く裏腹に、人を魅了せずにおかない柔和な人柄も懐しい限りである。彼の切なる希望が実り、一日も早く来日の機会の実現することを祈ってやまない次第である。